

百人一首の植物(2)

松 木 裸 志

今回は紅葉について語りましょう。

カエデ科のカエデはカエルテ（蛙手）の訛った語だそうですね。漢字の楓はマンサク科のフウの事で槭もカエデでは無いと牧野博士は言うそうですが、今は慣習で用いて居ます。花言葉は“遠慮”“陰柄”。さて百人一首に出てくるモミジを歌ったのは

「このたびはぬさもとりあはず手向山、もみぢの錦神のまにまに（菅家）」

たびは旅と度と掛けています。ぬさは御幣で手向山は奈良県の峠、まにまにとは御意のままにと
いう事なのです。

「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の、声聞く時ぞ秋は悲しき（猿丸大夫）」

隠遁者の孤独感や寂寥感がよく出て居ますね、作者は不明ですが誰かのかくれ名だそうです。鹿の鳴声は雄が雌を呼ぶ時だそうです奈良公園で聞いた事がありました。仲間をも呼ぶ。

「をぐら山峰のもみぢ葉心あらば、いまひとたびのみゆき待たなむ（藤原忠平）」

をぐら山は京都嵯峨にあり、みゆきは醍醐天皇への願いで、紅葉よ行幸まで散らずに待てとの願いを托したものです。

「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は、龍田の川の錦なりけり（能因法師）」

嵐吹くは満山の紅葉が散乱する様、三室の山は大和国生駒郡、龍田の川も生駒郡。

歌の解釈は文学や歌道に堪能な語者のどなたかにお尋ね下さい、読めば読む程味ある奥深い心境の様ですが、無風流な私には裏の裏まで察知する力がありません。ちょっと万葉集を開いて見ましょう。難かしいですがモミジに関するもの2首、

「吾が屋戸に黄変づかへるで見るごとに妹を懸けつつ恋ひぬ日はなし」

吾が屋戸はアガヤドで、黄変づかへるではモミづ蛙手です、妹は恋人です。

「児毛知山若かへるでのもみづまで宿もと吾は思ふ汝は何どか思う」

児毛知山コモチヤマ、かへるでの蛙手の、もみづまで紅葉迄、宿もと吾は思ふネもとワはモふと読む、妹イモは恋人の事。

万葉研究家に聞かぬと仲々に解せぬ歌の様ですね。ここで紅葉について記しましょう。

本道に最もありふれたものには、ハウチワカエデ（羽団扇楓）、ヤマモミジ（山紅葉）、ミネカエデ（峰楓）、ミツデカエデ（三手楓）、オオイタヤメイゲツ（大板屋明月）、エゾイタヤメイゲツ（蝦夷板屋明月）、コハウチワカエデ（小羽団扇楓）、オオモミジ（大紅葉）、オガラバナ（麻幹花）等があります。正式のモミジは別名をイロハカエデとかタカオカエデと称して本州産です。イタヤカエデは黄変する部に入れ、黄葉種はみな略しましょう。又、カエデ科に属しないで紅葉するものも沢山ありますが省略。モミジの語源は、昔ベニバナを使って白絹を紅く染めて鮮紅色とする事をもみずると言うのが訛ったと言うのです。ちなみに源氏物語に柏木という巻がありこれに出てくるモミジはイロハカエデの事であるとの考証がありました。

カエデ科の分類には雁股状の（双翅果）角度が大切ですから標本を作る時は花と共にこの果実をも揃えましょう。美少女が恥かしそうに、顔にもみじを散らしたようにと形容した文章は仲々うまい表現ですね。